

渡辺克己著



第十一章●若松通り



奥付け／デジタルブックについて

- ・ わら屋根の町
- ・ 若宮さまと公園
- ・ 最初の印刷所
- ・ 西洋館のムジナ
- ・ 教育のふるさと
- ・ 滝廉太郎

第十一章 ● 若松通り

【写真】 大正初年の大分高等女学校

発行に当たって

▽この電子ブック「大分今昔」は昭和 37 (1962) 年 11 月から翌 38 (1963) 年 12 月末まで、1 年 2 カ月にわたり大分合同新聞に 295 回連載され、連載から 20 年後の昭和 58 (1983) 年大分合同新聞文化センターで書籍として出版されたものを、電子ブックとして再編集したものです。したがって、文中の「現在」とか「いま」というのは昭和 37、8 (1962～63) 年当時のことです。

▽使われている町名も、その後、街区制の変更によって連載当時とは変わっており、その場所を知る手がかりになる建物も、いまでは移転したり、なくなったりしているものがあります。このため、おもなものは各章の終わりに「注」として、昭和 58 (1983) 年現在の町名、場所を説明し、わかりやすくしています。



大正初年の大分高等女学校

わら屋根の町

竹町通りにたいして、本町通りが商店街第二号として台頭してきたが、若松通りはさしずめ商店街第三号候補として胎動しているといえそうだ。

映画、パチンコ、飲食店と最も人間的な欲望ととなり合わせの営業がハバをきかせている。バラック式新興商店街からぬけきっていないけれども、それがそれなりにどっしりと根を張って道頓堀的特徴を発揮してきたら、将来大分の名所にならないともかぎらない。

それにしても、この通りの昔を振り返ってみると、あのじみな、忘れられがちだった町が…と思わずにはいられない。

ここは、もともと府内城を中心とした武家屋敷町（荷揚町）の南のはしの通りであった。道路としては、鶴崎方面から大分の町へはいる唯一の一本道だが、それぞれ用向きのある町へ「通り抜ける」道路でしかなかった。

いまでも区画上の町名は、道路の北側の家並みは荷揚町、南側は南新地だ。

南新地は、中堀がいまの電車通りにあった堀から折れ曲がって、深く入りこんでいたところで、明治年代に埋め立て、新しい町が生まれたのである。明治、大正年代までは「開墾地」と呼ばれていた。

荷揚町側は、中級以下の府内藩士の住宅の土べいが、ひっそりと並んで、その奥にワラぶきのさむらい屋敷が、庭木にかこまれてあったのだ。あのワラぶきの家や土べいは、昭和になっ

てからも部分的に残っていた。ワラ屋根にはところどころ草がはえ、土べいには青ごけがまつわりついて、ナズナやドクダミがわがもの顔にはびこって、昔をなつかしんでいたのである。そういうところに、おそまきながら商店街の戦列に加わろうとする大きな変革があらわれてきたのは戦後のことだ。それまではまだまだのんびりしていた。

明治年代、中央通りからはいつて左側、いまのニコニコパチンコ店から紅心堂写真機店のあるかどに至る一角を国家材木店が占めていた。この材木店よりずっとおくれで、中央通りの三倉屋材木店の番頭だった人が、のれんを分けてもらって、いまの二十八万石付近に店を開いた。これが大津材木店で、昭和初年には店を閉じたが、この店のむすこが、戦後の犯罪史に名を残したカービン銃事件の天津健一である。

若宮さまと公園

若竹公園はいま掘り返されている。ビルが建ち新しい商店が軒を並べることになっている。南新地の商店があそこに出てきて、商店が引越したあとに公園が移るといふ、敷き地の交換をやったわけだ。

若松通りが商店街として発展するためには、あの広い敷き地に公園があつてはじやまだ。公園は商店街の裏側にあつて効用を発揮すべきだといふのである。戦後あそこに竹の公園を造成するとき、若松通り商店街が、いまのように成長しようとは上田市長も考えつかなかったのだろう。しかし、あそこが公園地

に指定されたのには、土地の因縁からみても理由があったのだ。「あそこには、もと若宮さまがあったよ」

土地の人は、そういつてなつかしがるのである。

いま上野東横前にある若宮八幡さまは、明治十四年から大正九年までの、約四十年間を南新地に鎮座して、市民に親しまれていたのである。若宮さまのあった聖地、あのあたりのこどもが境内でかくれんぼをしたり、マリつきをしたりした楽しい土地、そこに、こども公園を設けることは、公園造成に熱心だった当時としては当然のこと。

若宮八幡は、古い歴史を持っている。「能直（大友）又家臣を鎌倉につかわし鶴岡八幡宮を勧請せしむ」と「豊府聞書」にある。これは大友能直が守護として豊後へ入国した建久七年（一一九六年）のことといわれている。神社は初め古河津留（東大分Ⅱいまの岩田町のあたり）に建立したが、しばしば水災にみまわれるので、上野の現在地の、やや東寄りに遷座した。

島津軍が府内に攻めこんできたとき、若宮八幡の宮司高山氏は難をのがれるために社宝などを船に積み、一族の者をひきつれて海路京都に向かおうとして佐賀関沖で台風にあって沈没、全員水死してしまった。兵乱ぐらいで、社殿を捨てて逃げだすようなことでは、八幡さまの怒りに触れるだろう。いわゆる「神風」が吹いたのかもしれない。

大友のあとも代々の府内城主は若宮八幡を崇敬した。大給近貞の息女八十姫は心願のすじがあつてクシ（櫛）三十三枚を奉納したりしている。また同じころ社殿新築のため富クジで資金を集め大工事をしている。

これが明治十四年に、上野から南新地に遷座した理由ははっきりしないが、氏子が南新地十間堀から東一帯にわたっており、とくにこの南新地付近の氏子数が多かったため、便利のいい町内に移そうということになったものらしいと、現在の神官さんがいっていた。しかし、町の発展とともに、あのあたりも俗化し、しかも境内が狭いので、大正九年にもとの土地にお引越し願ったというわけだ。そのあとは戦災で焼けるまで商店が雑居して「若宮市場」と呼ばれていた。神社－若宮市場－公園－商店街。ずいぶん変動した土地だが、もう落ち着くだろう。

最初の印刷所

電車通りからはいったあたりは、前に書いた国家材木店をはじめ、明治年代としてはちよつと大きい店舗があった。現在の 大分銀行の位置には近代的金融業の草分けのような登高社が、明治初年に創立され、のちには、二十三銀行のクラブのような役割りを果たしていたが、この登高社のうしろ、現在は大分銀行の敷き地内にはいつているあたりに大分活版合資会社があった。明治十一年の創立だから、印刷会社としては草分けの部類にはいるだろう。南新地から若松通りにまたがった大きな工場で、明治三十五年ごろには男子職工四十二人を使っていたとあるから、相当大的な印刷所だったわけだ。

むろん動力で動かす印刷機を見たのは、大分市内では大正にはいつてからのことだから、明治年代の印刷機は手回しで、ガラガラボタン、ガラガラボタンとやっていた。

鶴崎の武士だった原田由也さんが、廃藩後、家禄奉還賜金として与えられた公債を出資して数人の人と創立したものだ。のち、大正十年に小林良三郎さんらが、この大分活版を買収して大分印刷株式会社とし、新しい機械を購入して事業を拡張していた。

ついでだが、大分町に最初に印刷技術を持ちこんで印刷業を始めたのは白井吉太郎さんという人で、県庁の布達などを印刷するため、京都の村上書林にいた吉太郎さんが明治六年に請われて大分にきたのが始まりといわれている。吉太郎さんは堀川町に小さな学校用品文房具店を開き、かたわら県庁の出版物を引き受けて木版に起こし手刷りの印刷をしていた。また木版刷りで「大分一週新聞」を出版し、県政のことや市井の見聞を読者に提供していた。これが大分県における新聞の開祖である。のちに大分町では珍しい三階建て洋式家屋を京町に建てて活版印刷業と文房具店を手広くやっていた村上堂の、これが前身である。もう一つ古い印刷所では八風堂というのが、古老の記憶に残っている。警察官をしていた数人の人が明治の末ごろ中央通りで始めたのだそうで、これをのちに高山英明さんが買収して高山活版社としたのである。

話が横道にそれたが、若松通りの西部地区には、この大分活版の大きな工場や、いまの松尾組のところに生山竜太郎という人の経営する生山絹織物所があった。また大分ロマンの付近には、のちに長崎控訴院判事をしていた衛藤一方さんの大きな邸宅が白い土べいを広くめぐらせていた。

大正年代になるとこれがガラリと変わって、朝日旅館、二見

旅館、長芳旅館、田崎タクシーなどがあのあたりに並び、あるいは松の湯（現中央温泉）や安達洋服店が店を出して電車通りに接近した小じんまりした町並みを形成していたのである。

西洋館のムジナ

電車通りに近い西の方から、若松通りは徐々に開けてきたが、いまの若竹日活のあたりは、ずいぶん後まで寂しい通りで、裏通りということばにふさわしい姿をしていた。南側の家は、ほとんどが南新地の通りに玄関を向けて、こちら側は勝手口のくぐり戸があるていどのものである。北側は武家屋敷の土べいとかぶき（冠木）門だけ。

いまの藤沢薬品会社のところに明治の中ごろ、宇都宮という人が洋式二階建てを新築して医院を開業した。もちろん玄関は南向きで、若松通りにはシリを向けていたのだが、このハイカラな西洋館は異彩をはなつた。個人で洋風の家を建てたのは、この医師が最初らしい。ガラスのはまった窓があるのも珍しかった。その窓から日本髪に白いエプロンの看護婦さんがチラツと顔をのぞかせることがあった。

大正年代には、この洋館の主は医師ではなく、ただの住宅となっていたが、相変わらずこのあたりでは異様に大きな建物で、しかも古びて陰気な空気がただよっていた。こどもたちは、こんな家は、すぐ化けもの屋敷の名をつけたがるもので、これも「化けもの」がでるのだの、草むした屋敷内にムジナが住んでいるのだのといって、こわがった。

ところが大手通りのかどまで行くと、七間余も間口のある東屋呉服店があつて、ここだけが商店の明るさをみなぎらせていた。明治九年に、いま新県庁舎が建っているところに大分県師範学校が新築開校されたとき、古川町で米屋をしていた東屋佐藤宇三郎さんが出てきて、学用品や雑貨の店を出し、のちに呉服商に転じたのだった。

大正年代以後はむすこの信一さんがあとを継いで、竹町方面の競争の激しい呉服屋とは異なつたふんいきを維持していた。いつも森閑としたあの通りに、ゆうぜんと構えた上品さが、婦人の好みにあつたものようだ。

東屋は戦災で店をたたんだが、戦後、この通りに商店が盛んにでき始めたとき、町名のない商店街はおかしいといふので、信一さんが名付け親となつて「若松通り」とし、振興会も作つたのである。

大手通りは、いま遊歩公園となつて大分市の名所の一つになつているが、もとの大手通りは現在の三分の一ぐらい。三分の二は西側に広げられたものである。

この大手通りに、明治三十二年に擲芳園（きつぽうえん）という私学校が新築された。二十八年に京町に開校し、浄安寺や来迎寺の間借り授業の後、大手通りに学校を建てたのだった。元気のいい若者が就学していたとみえ、大手通りに面した寄宿舎の窓から顔を出して、前を通る女学生をひやかすので大分高女の生徒からはきらわれていたそうだ。校長は浅沢源八郎という豪放らしい人な人で、酒が好きだった。学校経営はへただったとみえ、四十二年に廃校となつた。

教育のふるさと

新しい県庁舎が大手通りにそそりたつてから若松通りは、さらに活気を呈してきた。通行人の数は県庁舎ができる前に比べると数倍にふえている。とくに朝夕のラッシュ時は予想を越えた人通りとなったのに、町内の人はびっくりしてしまった。こんなに増加した通行人を、みすみすよそに逃がす手はあるまい。しかし若松通りは、向こうからころがり込んだこの幸運に、いまのところとまどつていているといったかつこうらしい。

あの新県庁舎の建っている土地は、明治いらい大分県の教育の発しよう地のような役割りを果たしている。あの土地には多くの人の思い出がしみこんでいるし、若松通りをはじめ、あのかいわいの町は、あの土地の教育史とともに歩んできたようなものなのだ。

明治九年に、大分町大字開墾地に大分県師範学校が新築されたと、大分県教育史にある。それが、いまの新県庁舎のところだ。「開墾地」というのは南新地一帯をいうのかと思つたら長池町の一部もそう呼ばれていたようだ。昔の地図をみると、府内城の東側から、いまの保健所の方に堀が深く入り込んでいまの県庁舎の南側へカギなりに食いこみ、南新地から伸びた中堀と道路をへだてて相對している。この堀も市内の堀の埋めたてのさい、中堀と同時に埋められ、「開墾地」と呼ばれたのである。そういう土地に師範学校が新築されたのが、県内に校舎というものが新築された最初だった。

師範学校が創立されたのは明治七年で、最初は藩学遊焉館あ

とに府内学校(荷揚町小学校の前身)と同居していた。当時は「師範学校伝習所」と称した。明治新政下の新学制発布で、訓導の養成が間にあわず、急造するのに大わらわだった。当時は六カ月の修業で訓導の免許を与えている。しかしそんな粗製乱造ではやはり安心できなかったとみえ「向こう五カ年間教師たることを免許する」という但し書付で送り出し、五年たてば再教育をして新たに免許を与えていた。

明治十八年に、大分県下最初の中学校として「県立大分中学校」が創立されたが、上野に校舎が新築される二十七年までの十年間は師範学校と同居していた。

同居した異質の学校というものは仲良くできないものどみえ、年とともに、いがみ合いが激しくなっていたようだ。相手の校舎のへいをドンドンバタバタたいて授業ができないようじやまをするといった騒ぎはしょっちゅうだった。この対抗意識は、師範学校が三十一年に春日浦に新築移転して、互いに遠く離れた後までも伝統的に続いている。

師範学校が去ったあと、明治三十三年に県立高等女学校(翌年大分高等女学校と改称)が開校され、さらに四十年に女子師範学校が創立して四年間同居している。

女子だからケンカはしなかったが、女子師範生がやや年上なものだから、女学校の生徒を扇動して教員の排せき運動をさせたりしたこともあったそうだ。大分高女はエビ茶に黒線のハカマ。女子師範生は紫紺のハカマにナデシコの花を浮きだした大きなバックルをつけていた。このバックルを付けたいばかりに女子師範に入學した娘さんもあった。

滝 廉太郎

遊歩公園は、いまは大分市の名所の一つになった。新県庁舎ができ、大手通りの交通量がふえてきたので、道路を大幅に占領している遊歩公園がじゃまになるという声が、ぼつぼつ出ているらしいが、大分市が大都市的様相をおびてくれればくるほど「都会のさばく」と化していくくうるおいのない中心部に、このようなオアシスが必要となってくるのだ。はやまっつてはいけない。

大雨が降ると、直ちに外堀の堀があふれて大手通りに流れてくるので大手通りは「大手川」の異名をちようだいしていたことは前に書いたが、その「大手川」が心楽しい緑の散歩道となり付近のこどもが安心して遊べる公園になろうとは、あのあたりの町民は考えもしなかったことだった。

あの遊歩公園のまん中辺、栄町筋から出たところに「滝廉太郎終焉の地」の標柱と滝廉太郎の年譜を書いた札が立っており、そこからちよつと離れたところに朝倉文夫さん制作の廉太郎像が南に向かって立っている。

滝廉太郎の家は代々日出藩士で祖父吉惇は禄高二百五十石の家老職に進んでいる。

父吉弘は明治三年に日出藩大参事となり、のちに大蔵省、太政官、内務省などに勤め、明治二十二年に大分に帰ってからは大分郡長や直入郡長を勤めた。二十八年に公職を退いて大分市（大手通り）に隠宅を構えるまでの長い年月は浮き草かぎようの官員生活で各地を転々としていたのである。

廉太郎は東京で生まれ、父吉弘が東京、神奈川、富山、さらに大分と転任するのについて回っているので小学校も東京、富山、大分、竹田の各地に転学している。大分では明治三十三年に師範学校付属小学校の高等科に通い、竹田では竹田小学校高等科に学んで、二十七年に同校を卒業している。卒業とともに東京に出て音楽学校に入学しかれの天与の才能を磨くことになった。

明治三十年ごろは小中学校の唱歌選定を盛んにやった時代で、そのころの名士に依頼して作った中学校唱歌三十八種の歌詞の作曲を懸賞募集したことがある。これに廉太郎が応募したことが、かれを一躍天才作曲家におしあげる縁となった。そのときの応募作が「荒城の月」「箱根八里」「豊太閤」の三曲で、三つとも入選している。その後かれの作曲したかずかずの唱歌はいまもほとんど愛唱されている。

「はとぼつぽ」「雪やこんこん」「もういくつ寝るとお正月」「すずめ、すずめきょうもまた」などの幼稚園唱歌が廉太郎の作曲であることを知らない人は少なからう。

明治三十三年、二十三歳の廉太郎は、男子として初の音楽研究の留学生となってドイツに旅立ち翌年病を得て十月に帰国した。

大分町大手通りの父母のもとで静養したがそのかいなく、三十六年六月二十九日二十五歳で他界した。廉太郎が病の身を祖国に運んだ第一声は「日本はいいなあ、日本の空はきれいだい空気もすきとおってあまい味がする」ということばだったという。



オオイタデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたく願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「大分今昔」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

デジタルブック版「大分今昔」 第十一章 ●若松通り

2007年10月26日初版発行

筆者 渡辺 克己

挿絵 田中 昇（着色：佐藤 克治）

編集 大分合同新聞社

制作 川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

〒870-8605 大分市府内町3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内

© 大分合同新聞社

著者略歴◇渡辺克己
大分県大分市佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退職。昭和二十七年から同四十二年まで大分市教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。
郷土史を研究し「大分今昔」「豊後のまがい物散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」「豊後の武将と合戦」「ふるさとの野の仏たち」等の著書。